怪異考

寺田寅彦

　物理学の学徒としての自分は、日常普通に身辺に起こる自然現象に不思議を感ずる事は多いが、古来のいわゆる「怪異」なるものの存在を信ずることはできない。しかし昔からわれわれの祖先が多くの「怪異」に遭遇しそれを「目撃」して来たという人事的現象としての「事実」を否定するものではない。われわれの役目はただそれらの怪異現象の記録を現代科学上の語彙（ごい）を借りて翻訳するだけの事でなければならない。この仕事はしかしはなはだ困難なものである。錯覚や誇張さらに転訛（てんか）のレンズによってはなはだしくゆがめられた影像からその本体を言い当てなければならない。そ

れを的確に成効しうるためにはそのレンズに関する方則を正確に知らなければならない、のみならず、またその個々の場合における決定条件として多様の因子を逐一に明らかにしなければならない。この前者の方則については心理学のほうから若干の根拠は供給されるとしても、後者に関する資料はほとんどすべての場合において永久に失われている。従ってほんとうに科学的な推定を下すということはほとんど望み難いことである。ただできうる唯一の方法としては、有るだけの材料から、科学的に合理的な一つの「可能性」を指摘するに過ぎない。もっとももこの可能性が非常に多様で

あれば、その中の二三を指摘してみても、それは結局なんらの価値もない漫談となってしまうであろうが、多くの場合に必ずしもそうとは限らない。ことにある一種の怪異に関する記録が豊富にあればあるほど、この可能性の範囲はかなりまで押しせばめられる。従ってやや「もっともらしい仮説」というまでには漕ぎつけられる見込みがあるのである。そこまで行けば、それはともかくも一つの仮説として存在する価値を認めなければならず、また実際科学者たちにある暗示を提供するだけの効果をもつ事も有りうるであろうと思われる。

そういう意味で自分が従来多少興味をもっている怪異が若干ある。しかしこれを正当に研究するためにまず少なくも一通りは関係文献を古書の中から拾い集めてかかる必要がある。それは到底今の自分には急にできそうもない。それかと言っていつになったらそれができるという確かな見込みも立たない。

それで、ただここにはほんの一つの空想、ただし多少科学的の考察に基づいた空想あるいは「小説」を備忘録として書き留めておく。もしこれらの問題に興味をもつほんとうの考証家があればありがたいと思うまでである。

一

その怪異の第一は、自分の郷里高知（こうち）付近で知られている「孕（はらみ）のジャン」と称するものである。孕は地名で、高知の海岸に並行する山脈が浦戸湾（うらどわん）に中断されたその両側の突端の地とその海峡とを込めた名前である。この現象については、最近に、土佐郷土史（とさきょうどし）の権威として知られた杜山居士寺石正路（とざんこじてらいしまさみち）氏が雑誌「土佐史壇」第十七号に「郷土史断片」その三〇として記載されたものがある。「（前略）昔はだいぶ評判の事であったが、こ

のごろは全くその沙汰（さた）がない、根拠の無き話かと思えば、「土佐今昔物語」という書に、沼澄（ぬまずみ）（鹿持雅澄翁（かもちまさずみおう））の名をもって左のとおりしるされている。

孕の海にジャンと唱うる稀有（けう）のものありけり、たれしの人もいまだその形を見たるものなく、その物は夜半にジャーンと鳴り響きて海上を過ぎ行くなりけり、漁業をして世を渡るどちに、夜半に小舟浮かべて、あるは釣（つ）りをたれ、あるいは網を打ちて幸（さち）多かるも、このも［＃「も」に「原」の注記］海上を行き過ぐればたちまちに魚騒ぎ走りて、時を移すともその夜はまた幸（さち）なかりけり、高知ほとりの方言に、もの

の破談になりたる事をジャンになりたりというも、この海上行き過ぐるものよりいでたることなん語り伝えたりとや。

この文は鹿持翁の筆なればおおよそ小百年前のことにして孕（はらみ）のジャンはこのほどの昔よりもすでにその伝があったことが知れる（後略）。」寺石氏はこのジャンの意味の転用に関する上記の説の誤謬（ごびゅう）を指摘している。また終わりに諏訪湖（すわこ）の神渡りの音響の事を引き、孕のジャンは「何か微妙な地の震動に関したことではあるまいか」と述べておられる。

私は幼時近所の老人からたびたびこれと同様な話を

聞かされた。そしてもし記憶の誤りでなければ、このジャンの音響とともに「水面にさざ波が立つ」という事が上記の記載に付加されていた。

この話を導き出しそうな音の原因に関する自分のはじめの考えは、もしや昆虫（こんちゅう）かあるいは鳥類の群れが飛び立つ音ではないかと思ってみたが、しかしそれは夜半の事だというし、また魚が釣（つ）れなくなるという事が確実とすれば単に空中の音波のためとは考えにくいと思われた。ところが先年筑波山（つくばさん）の北側の柿岡（かきおか）の盆地へ行った時にかの地には珍しくない「地鳴り」の現象を数回体験した。その時に自分は全く神来的に「孕（はらみ）

のジャンはこれだ」と感じた。この地鳴りの音は考え方によってはやはりジャーンとも形容されうる種類の雑音であるし、またその地盤の性質、地表の形状や被覆物の種類によってはいっそうジャーンと聞こえやすくなるであろうと思われうるたちのものである。そして明らかに一方から一方へ「過ぎ行く」音で、それが空中ともなく地中ともなく過ぎ去って行くのは実際他に比較するもののない奇異の感じを起こさせるものである。ちょうど自分が観測室内にいた時に起こった地鳴りの際には、磁力計の頂上に付いている管が共鳴してその頭が少なくも数ミリほど振動するのを明らかに

認める事ができたし、また山中で聞いた時は立っている靴(くつ)の底に明らかにきわめて短週期の震動を感じた。これだけの振動があれば、適当な境界条件の下に水面のさざ波を起こしうるはずであるし、また水中の魚類の耳石等にもこれを感じなければならないわけである。もっとも、魚類がこの種の短週期弾性波に対してどう反応するかについて自分はあまりよく知らないが、これだけの振動に全然無感覚であろうとは想像し難い。

地鳴りの現象については、わが国でもすでに大森(おおもり)博士らによっていろいろ研究された文献がある。そのほんとうの原因的機巧はまだよくわからないが、要する

に物理的には全くただ小規模の地震であって、それが小局部にかつ多くは地殻（ちかく）表層（ひょうそう）に近く起こるというに過ぎないであろうと判断される。

もし「孕（はらみ）のジャン」として知られた記録どおりの現象が、実際にあったものと仮定し、またこれが筑波地方（つくばちほう）の地鳴りと同一系統の地球物理学的現象であると仮定すると、それから多少興味のある地震学上のスペキュレーションを組み立てる事ができる。

ジャンの記録はすでに百年前にはある。もっともこの記録では、当時これが現存したものか、あるいは過去の事として書いたものか、あまり判然とはしない。

そしてとにかくわれわれの現時はないと言われている。自分の幼時にこの事を話した老人は現に自分でこれを体験したかのごとく話したが、それは疑わしいとしても、この老人の頭の若かった時代にこの話がかなりの生々しい色彩をもって流布されていた事は確からしい。

　土佐における大地変の最初の記録としては、西暦六八四年天武天皇の時代の地震で、土地五十万頃が陥落して海となったという記録があり、それからずっと後には慶長九年（一六〇四）と宝永四年（一七〇七）ならびに安政元年（一八五四）とこの三回の大地震が知られており、このうちで、後の二回には、海浜の地帯

に隆起や沈降のあった事が知られている。さて、これらの大地震によって表明される地殻（ちかく）の歪（ひずみ）は、地震のない時でも、常にどこかに、なんらかの程度に存在しているのであるから、もし適当な条件の具備した局部の地殻があればそこに対し小規模の地震、すなわち地鳴りの現象を誘起しても不思議はないわけである。そして、それがある時代には頻繁（ひんぱん）に現われ、他の時代にはほとんど現われなくなったとしても、それほど不思議な事とは思われない。

今問題の孕（はらみ）の地形を見ると、この海峡は、五万分の一の地形図を見れば、何人も疑う余地のないほど

明瞭（めいりょう）な地殻（ちかく）の割れ目である。すなわち東西に走る連山が南北に走る断層線で中断されたものである。さらにまたこの海峡の西側に比べると東側の山脈の脊梁（せきりょう）は明らかに百メートルほどを沈下し、その上に、南のほうに数百メートルもずれ動いたものである事がわかる。もっともこの断層の生成、これに伴なう沈下や滑動（かつどう）の起こった時代は、おそらく非常に古い地質時代に属するもので、その時の歪（ひずみ）が現在まで残っていようとは信ぜられない。しかしそのような著しい地殻の古きずが現在の歪に対して時々過敏になりうるであろうと想像するのは単に無稽（むけい）な空想とは言われないであ

ろう。

それで問題の怪異の一つの可能な説明としては、これは、ある時代、おそらくは宝永地震後、安政地震のころへかけて、この地方の地殻に特殊な歪を生じたために、表層岩石の内部に小規模の地すべりを起こし、従って地鳴りの現象を生じていたのが、近年に至ってその歪が調整されてもはや変動を起こさなくなったのではないかという事である。

この作業仮説の正否を吟味しうるためには、われわれは後日を待つほかはない。もし他日この同じ地方に再び頻繁(ひんぱん)に地鳴りを生ずるような事が起これば、その

時にはじめてこの想像が確かめられる事になる。しかしそれまでにどれほどの歳月がたつであろうかという事については全く見当がつかない。ただ漠然（ばくぜん）と、上記三つの大地震の年代差から考えて、今後数十年ないし百年の間に起こりはしないかと考えられる強震が実際起こるとすれば、その前後に何事かありはしないかという暗示を次の代の人々に残すだけの事である。しかしもし現代の読者のうちでこれと類似の怪異伝説あるいは地鳴りの現象についてなんらかの資料を教えてくれる人でもあれば望外の幸いである。

二

次に問題にしたいと思う怪異は「頽馬（たいば）」「提馬風（たいばふう）」また濃尾（のうび）地方で「ギバ」と称するもので、これは馬を襲ってそれを斃死（へいし）させる魔物だそうである。これに関する自分の知識はただ、磯清（いそきよし） 氏著「民俗怪異篇（みんぞくかいいへん）」によって得ただけであって、特に自分で調べたわけではないが、近ごろ偶然この書物の記事を読んだ時に、考えついた一つの仮説がある。それは、この怪異はセントエルモの火、あるいはこれに類似の空中放電現象と連関したものではないかという事である。

右の磯氏の記述によるとこのギバの現象には二説ある。その一つによると旋風のようなものが襲来して、その際に「馬のたてがみが一筋一筋に立って、そのたてがみの中に細い糸のようなあかい光がさし込む」と馬はまもなく死ぬ、そのとき、もし「すぐと刀を抜いて馬の行く手を切り払う」と、その風がそれて行って馬を襲わないというのである。もう一つの説によると、「玉虫色の小さな馬に乗って、猩々緋（しょうじょうひ）のようなものの着物を着て、金の瓔珞（ようらく）をいただいた」女が空中から襲って来て「妖女（ようじょ）はその馬の前足をあげて被害の馬の口に当ててあと足を耳からたてがみにかけて踏みつける、

つまり馬面にひしと組みつくのである」。この現象は短時間で消え馬はたおれるというのである。この二説は磯氏も注意されたように相互に類似している。これを科学的な目で見ると要するに馬の頭部の近辺に或る異常な光の現象が起こるというふうに解釈される。

次に注意すべきは、この怪異の起こる時の時間的分布である。すなわち「濃州では四月から七月までで、別して五六月が多いという。七月になりかかると、秋風が立ち初める、とギバの難は影を隠してしまう。武州常州あたりでもやはり四月から七月と言っている」。また晴天には現われず「晴れては曇り曇っては

晴れる、村雲などが出たりはいったりする日に限って」現われるとある。また一日じゅうの時刻については「朝五つ時前（午前八時）、夕七つ時過ぎ（午後四時）にはかけられない、多くは日盛りであるという」とある。

またこの出現するのにおのずから場所が定まっている傾向があり、たとえば一里塚（いちりづか）のような所の例があげられている。

もう一つ参考になるのは、馬をギバの難から救う方法として、これが襲いかかった時に、半纏（はんてん）でも風呂敷（ふろしき）でも莚（むしろ）でも、そういうものを馬の首からかぶせると

いいということがある。もちろん、その上に、尾の上の背骨に針を打ち込んだりするそうであるが、このようにものをかぶせる事が「針よりも大切なまじない」だと考えられている。またこれと共通な点のあるのは、平生のギバよけのまじないとして、馬に腹当てをさせるとよい、ただしそれは「大津東町上下仕合」と白く染めぬいたものを用いる。「このアブヨケをした馬がギバにかけられてたおれたのを見た事がないと、言われている」。

別の説として美濃（みの）では「ギバは白虻（しろあぶ）のような、目にも見えない虫だという説がある、また常陸（ひたち）ではその虫

を大津虫と呼んでいる。虫は玉虫色をしていて足長蜂（あしながばち）に似ている」という記事もある。

以上の現象の記述には、なんらか事実に基づいたものがあるという前提を置いて、さて何かこれに類似した自然現象はないかと考えてみると、まず第一に旋風が考えられる。もし旋風のためとすればそれは馬が急激な気圧降下のために窒息でもするか内臓の障害でも起こすのであろうかと推測される。しかしそれだけであってこのギバの他の属性に関する記述とはなんら著しい照応を見ない。もっとも旋風は多くの場合に雷雨現象と連関して起こるから、その点で後に述べる時間

分布の関係から言って多少この説に有利な点はある。しかしいわゆる光の現象やまた前述のまじないの意味は全くこれでは説明されない。

これに反して、ギバがなんらかの空中放電によるものと考えると、たてがみが立ち上がったり、光の線条が見えたり、玉虫色の光が馬の首を包んだりする事が、全部生きた科学的記述としての意味をもって来る。また衣服その他で頭をおおい、また腹部を保護するという事は、つまり電気の半導体で馬の身体の一部を被覆して、放電による電流が直接にその局部の肉体に流れるのを防ぐという意味に解釈されて来るのである。

またこういう放電現象が夏期に多い事、および日中に多い事は周知の事実であるので、前述の時間分布は、これときわめてよく符合する事になる。

場所のおのずから定まる傾向については、自分は何事も具体的のことをいうだけの材料を持ち合わせないが、これも調べてみたら、おそらく放電現象の多い場所と符合するようなことがありはしないかと想像される。

しかしこの仮説にとって重大な試金石となるものは、馬のこの種の放電に対する反応いかんである。すなわち人間にはなんらの害を及ぼさない程度の放電によっ

て馬が斃死しうるかどうかという事である。これについてはおそらくすでに文献もある事と思われるが、自分はまだよく承知していない。ただ馬が特に感電に対して弱いものであるという事だけは馬に関する専門家に聞いて確かめる事ができた。なおこれについては高圧電源を用いていくらも実験する事が可能であり、またすでにいくらかは実験された事かもしれない。しかし実験室で、ある指定された条件のもとにおいて行なわれた実験が必ずしも直接に野外の現象に適用されるかどうかは疑わしい。結局は実際の野外における現象の正確な観察を待つ必要がある。

ギバの現象が現時においてもどこかの地方で存在を認められているか。もしいるとすればこれに遭遇したという人の記述をできるだけ多く収集したいものである。読者の中でもしなんらかの資料を供給されるならば大幸である。

（この「怪異考」は機会があらば、あとを続けたいという希望をもっている。昭和二年十月四日）

（昭和二年十一月、思想）

底本：「寺田寅彦随筆集　第二巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店
１９４７（昭和22）年９月10日第１刷発行
１９６４（昭和39）年１月16日第22刷改版発行
１９９７（平成９）年５月６日第70刷発行
※底本の誤記等を確認するにあたり、「寺田寅彦全集」（岩波書店）を参照しました。
入力：（株）モモ
校正：かとうかおり
２０００年10月３日公開
２００３年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。